世界を周るは転生者(チート)inけいおん！

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を周るは転生者（チート）ｉｎけいおん！

【Ｎコード】
Ｎ１８１６ＢＡ

【作者名】
チルノ

【あらすじ】
神様のミスで死んでしまった、風華　桜花（男）
お詫びとして一方的に転生生活をさせられることになる。
与えられる能力はまさしく万能で凡庸性のあるチートだった。
様々な世界で生きていく覚悟を決めた桜花は、能力を生かしたくましく生きていく。

プロローグ

どうも、俺の名前は風華　桜花　現役2年の高校生だぜ！
そんな俺は今、一つの問題に直面している。
それは、ここはどこだ！と言うコトだ

「・・・ん～、確か俺は学校の帰りに・・本屋によって・・・立ち読みしてたら・・！！」

「そうか！俺死んだ！！」

「その通りです！」

「え～・・会話はめんどくさいんで一方的に喋りますよ！」

「貴方は死にまして・・それは私どものミス、貴方はまだ死ぬべき人ではないのです」

「なので私どもはお詫びとして転生をプレゼントしようと思います
「ちょ・・話聞いて・・」！！」

「申し遅れましたが私は、神様です。」

「それで転生の事ですが、貴方は生前、アニメや漫画が大層お好きだったようなので様々なアニメの世界に転生してもらうことにしました。」

「それで、アニメの世界と言ってもランダムに送られるのですぐに

死んでしまう可能性もあるわけです。」

「そこで、特典として貴方に二三能力を与える事にしました。」

「与えられる基本能力は、あらゆる力を操る能力です。」

「これは、貴方や貴方の周囲の物のあらゆる力を操ることができます。」

「次に、身体能力の最強化。」

「これは、文字通り貴方の身体能力を他の追随を許さないほどに強化させます。」

「最後に・・・そうですね、可愛い娘に縁があるくらいの恩恵をあげます。」

「まあ？これは縁があるだけで、モテるわけじゃないですけどね！ざま―みろ！」

「まあ、こんなもんですかね。」

「んじゃあ、そろそろ行って来て下さい！あ、その世界で死ぬか物語を終えることで次の世界に赤ん坊になって転生、またはその世界によっては今の年齢で転生します。世界ごとに得た力や経験は引き継がれるので安心して下さい。容姿については転生ごとに変わりますんでよろしく」

「それじゃ、逝ってらっしゃい！」

パカッ・・・ヒュ〜

・・俺は思った、一方的すぎる神様にただ一言”死ね”と・・・

目が覚めるとそこには、幸せそうに俺を見る両親と、赤ん坊になった俺の小さな手があった。

そこから始まる転生人生、第一の世界で俺は”平沢　桜”として生きていく――――

桜ケ丘入学！（前書き）

え～頑張ります！

桜ケ丘入学！

はい、どーも風華　桜花こと平沢　桜です。男なのにさくらと読みます・・何故だ・・

まあ、そんなこんなで早くも中学三年生になった俺は双子の妹である平沢　唯とともに受験勉強に励んでいる。
受ける高校は・・まあ、原作に関与したいので桜ケ丘高校に願書を出した。補正がかかってるのか共学化してたしね。

「おーくん・・これ・・分からないよ・・！・・くっ」

「はあ・・・無駄に深刻そうに言うな。で？どれだ？」

「これ～」

とこんな感じ、唯のいう”おーくん”と言うのは桜→おうとも読める→おーくん。と言った感じでできた呼び名。
原作通り、唯は頭が悪い。・・・俺？俺はあれだ貰った力を操る能力で読解力、理解力、解析力、計算力・・ｅｔｃを限界まで上げたのさ！卑怯？何それおいしいの？って感じだ。

ちなみに、俺は既にギターを持っている。少ないこづかいを貯めて買った。実力は・・多分上手い方、小学３年頃からギター無しでも本やら読んで勉強してたし、暇があれば弾いてたから実力は有るはずだ。そのために演奏力や歌唱力底上げしたんだしｗ
もう一度言おう、卑怯？なにそれおいしいの？

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、少し休憩したら？クッキー焼いたから

一緒に食べよう？」

「お～クッキー！憂～大好き～！」

「あはは、私もだよお姉ちゃん」

これも、恒例の行動だ。唯が抱きついて憂が嬉しそうに抱きつかれる。まあ、俺にもしてくるから困るんだけどね・・

「ん～、じゃあ休憩にしようか」

・・・居間・・・

「むぐむぐ・・・で？お姉ちゃんの勉強はどうなの？お兄ちゃん？」

「ん？・・・絶望的だ・・」

「え！？そんなに！？」

「冗談だ、まあ・・あと1カ月あるしその間ちゃんと勉強すれば行けるだろ。」

「そっか～、よかったねお姉ちゃん！」

「うん！むぐむぐ・・もぐもぐ・・」

「・・唯、俺のクッキーを取るな」

「てへへ・・」

「まあ、良いよ。ほら食べろ」

「良いの？おーくんの分なのに・・」

「クッキーを凝視して言うな。いいよ、俺はお前らの兄ちゃんだからな」ニコッ

「う・・うん！！ありがとう！／／／／」

「・・・／／／／」

「むぐむぐ・・ごくんっ・・よ～し！勉強するぞー！」

「お・・おう、どうした急にやる気になったな・・」

「うん！絶対おーくんと同じとこに行くって決めたもん！」

「ははは・・まあ、頑張ってくれ」

「頑張って！お姉ちゃん！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・

そして、合格発表の日

まあ、俺は受かった。全問正解だ。面接、学科で最高１５００点満

点の中１５００／１５００を取ると言う快挙だったw
そんで唯はと言うと・・

「うう・・・・」

「おいおい・・まだ縮こまってんのか？」

「だって緊張するんだもん・・」

まだ、合格発表を見れずにいた。
そして結局・・

「おーくん！見てきて！お願い！」

と受験番号を渡してくる。

「はあ、分かったよ・・」

番号は・・・１１２７か・・くすっ・・アイツの誕生日と同じだな・・っとえ～と１１２７・・１１２７・・
俺は、１１２０から順に見ていく、１１２０・・１１２１・・１１２３・・１１２６・・１１２８！？・・まさかの不合格・・
俺は唯の元へ踵を返すと振り返る途中である掲示板が見える。
そこには『補欠合格者』と書いてある。何らかの理由で合格者が入学できなくなり急遽合格となった者だ。
そこには大きく５人の合格者か書いてあり。その中に『１１２７平沢唯・・・合格』と書いてある。

「はあ・・悪運の強い奴だよお前は・・」

と俺は微笑んだ。

「おい唯！合格してるぞ！！」

と大きく言ってやると

「え・・？や・・やったあああ！！！！」

と唯が飛び跳ねて喜んだ。

その日の晩御飯は憂が張り切って過去見ないほどの御馳走だった。

主人公設定（前書き）

これ入れるの忘れてました・・・

主人公設定

・主人公：平沢　桜　♂

・年齢：１６才　誕生日は１１月２７日

唯の双子の兄として生まれる。

・能力：あらゆる力を操る能力→自分または周囲の力を自在に操ることができる。

現在は、計算力等をあげて利用

イカサマ

している。

・容姿：ブリーチの一護の死神の力を失う直前の髪が長かった時の奴で茶髪

・神様の手違いで死んでしまった現役高校生。それを神様がお詫びと言って一方的に転生

その際、能力も渡されてしまった。個人的には輪廻に戻って生まれ変わるのもいいと思っていた。

・転生最初にけいおん！の世界に来る、家族構成は平沢家・・つまり主人公である平沢唯の兄として生まれてきた。

妹には多少甘い。そのせいか唯や憂にもかなり好意を持たれている。

部活か・・・どうしようかな？（前書き）

こんにちはチルノです！

今回はとりあえず入部→ギターどうしよう？まで行きたいです！

部活か・・・どうしようかな？

どーも、平沢　桜です。
前回、唯の世話をしながらもなんとか無事桜ケ丘高校に入学しました。
んで、入学式を終えていま教室です。なんと唯と同じクラス！原作メンバーも紬が同じです。
現在、自己紹介の時間ですね！

「・・・です！よろしくお願いします！」

俺の前のクラスメイトAさんが自己紹介を終える。

「（俺の番か・・）」ガタッ

「え～・・平沢　桜です。趣味はギターとか家事全般、特技は～・・運動が得意です。これからよろしくお願いします。」

「・・・／／／」

「・・・／／／（カッコいい・・）」

「ぽ～・・・・／／／」

「はっ・・んん！で・・では次の人」

「はいっ！平沢唯です！おーくんの妹です！趣味はごろごろすることとおーくんに抱きつくことです！特技はありません！」

「おーくんって・・？」

「ああ、俺の事だ」

「唯、余り変なことを言うな。それと自己紹介はもっときっちりやれ」

「ええ～？い～じゃん！」

「まったく・・いいからもう座れ・・」

「ぶー・・は～い。」ガタッ

とまあ、こんな感じで唯と俺の自己紹介は終わり二週間がたった・・

「唯？桜？何やってるの？」

こいつは原作でもおなじみ、俺達平沢兄妹の幼馴染だ。こいつには唯がらみでいろいろ世話になった

「ん？唯がなどこの部活に入ろうか～ってな」

「う～・・」

「まだ、決めてなかったの！？もう二週間もたってるわよ？」

「で・・でも私得意な事とかやりたいことも無いし・・」

「はあ・・こうやってニートが出来上がってくのね・・」

「部活やってないだけでニート！？」

「桜はまだ部活には入ってないの？」

「ああ・・唯がな、昨日――」

・・・昨晩、平沢家・・・

「ねー、おーくんも一緒の部活に入ろうよ！お願い！」

「なんでだよ！別にいいじゃねえか！唯は唯でやりたいとこに入れよ」

「でも・・」

「・・はあ、分かったよ・・で？どこに入るんだ？」

「それが、まだ決まってないんだ☆」

・・・・・・・・・・・・・・

「――って感じなわけだ」

「あんたも大変なのね・・」

「ああ・・もう慣れたさ」

「むむむ～・・」

そこからしばらく考えていた唯だが、結局決まらずその場は解散となった。

～唯ｓｉｄｅ～

私は今、部活紹介掲示板を見かけたので見ている。
おーくんも同じ部活に入ることが決まったのはいいんだけど・・
どこに入ろうかな・・んん？

「軽音部・・？」

ちょっと気になるな～・・何をする所なんだろう？
軽い音楽って書くから・・カスタネットとか？口笛とか？

「やってみようかな・・・」

ということで軽音部に入ることにした。

～唯ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～桜ｓｉｄｅ～

「え？軽音部？」

「うん！」

「何するところか分かってるのか？（原作通りだな・・）」

「ううん。でも軽い音楽って言うくらいだから、きっと大丈夫だよ～」

「ふ～ん・・まあ、間違ってるな」

「えっ！？」

「お姉ちゃん・・軽音部って多分バンドとかするところだよ？」

「バンド？」

「うん。ギターとかドラムとか」

「ええ！？私ギターなんて引けないよ！？」

「まあ、この機会に初めてみたらどうだ？俺もギターやってるから入れるし」

「・・・うん、分かった！やってみるよ！」

・・・翌日・・・

「と言うわけで、軽音部って所に入ってみました！」

「そうなんだ・・でも大丈夫なの？」

「大丈夫だ、俺がちゃんと面倒見てやるから」

「そう、じゃあ大丈夫・・ね？」

「なんで疑問形なの？和ちゃん・・」

「気にしなさんな。んじゃ唯、行くぞ～」

「うん！じゃあ行ってくるね！和ちゃん！」

「頑張るのよ？唯」

・・・音楽準備室・・・

「あうあうあう・・」

「どうしたよ・・唯・・」

「あれだよ・・真っ白な人が・・」

「ココは一応去年まで女子校だったんだ・・お前の思うような姿をした奴はいないだろ・・」

「でもでも・・」

「はあ・・」

ガシッ

「ひゃあう！！？」

「なにやってんの？あんたたち？」

「おう？（りっちゃんですね分かります）」

「まさか、あんたたちが平沢さん？入部希望の？」

「は・・はい？」

「そっかー！聞いてるよー！！ギターがすごく上手いんだよね！！」

「・・・（こいつ、話聞かねえな～・・）」

「おーい！！入部希望者がきたぞー！しかも二人だ！！」

・・・という感じの過程があって～現在は、原作のように唯が退部しに来たとかいうことも無く進み楽器の話になった

「え～と・・私、ギターとかできないんだけど・・大丈夫かな～？」

「う～ん・・大丈夫じゃないか？」

「うん、これから始めれば良いしね」

「そうそう、これから頑張ればいいのよ～」

「じゃ・・じゃあ、私ギター始めるよ！」

「「「お～！」」」ぱちぱちぱち

で、唯はギター担当となった。

「で、桜は何をするんだ？やっぱギター？それともベース？」

「始めるんならその二つが無難かな？」

「俺は、ギター弾けるぞ」

「私的にはベースが似合うと思うって弾けるんかい！！」

「ナイスなツッコミだな！」

「うるさいわい！」

「じゃあ、今心配するのは唯だけで良いのかな？」

「うん！」

「じゃあ、唯ちゃんのギターについてはまた明日考えましょう！」

「そうか、私ギターやるんだった！」

「ここは喫茶店じゃねえぞ」

「てへへ・・」

そんな感じで、俺と唯の初部活は終了した。

・・・平沢家・・・

「唯～？いるか～？」

「うん？どうしたの？あーくん？」

「ご飯もう出来るよ～。あれ？お兄ちゃんなにその大きな箱？」

「うん、唯にプレゼントだ。ほら俺受験で忙しくて唯の誕生日にプレゼントやれなかったじゃん？」

「ああ～そういえばそうだね」

そう、あれは中三の受験戦争真っ只中のこと――――

――――――平沢家、唯と桜の誕生日――――――

「お兄ちゃん、お姉ちゃん！誕生日おめでと――！」

「おお～ありがとう！憂！」

「これは私とお父さんとお母さんからのプレゼントだよ！」

俺と唯はそれぞれ二つづつプレゼントを受け取る。

「はい！これ私からおーくんにプレゼントだよ！」

俺がもらったのは、唯がいつも着てるような文字の書いてあるTシャツ三枚だ

「お・・おう、ありがとう唯」

「どーいたしまして！」

俺はここで、一応唯への贈り物は買ってあるしかしここで渡すわけには行かないな

「すまん・・俺は唯へのプレゼント用意できてないんだ・・」

「そうなの？でもいいよ！気にしなくても！」

「いつかちゃんと渡すから、期待して待っててくれ！」

「そう・・じゃあ、期待してるね！！！」

とこんな感じで俺は唯にプレゼントをあげなかった

――――――――――現在――――――――――

「ああ～確かにそうだったね～」

「で、今回そのプレゼントを用意した」

「え！？本当！？わ～い！！」

「ほら、こいつだ」

俺が渡したのは、ギター・・それも原作で唯が勝ったギターだつまりギブソンのレスポールだ

「わ～！！可愛いギター！！ありがとー！！」

「わあ！よかったね！お姉ちゃん！これでギター始められるね！」

「うん！本当にありがとう！！！」

これで・・やっと軽音部が始められるかな・・はははは

中間テスト！？唯ェ（前書き）

今回は、合宿編！結構楽しい感じがする！

中間テスト！？唯ェ

はいどーも、平沢　桜です。
唯がギターを始めてから約一ヶ月。
もうすぐ合宿の始まる時期です、ですがその前に・・・

「うう・・中間テストのこと忘れてたよ～・・」

「おら、そんなこと言ってねえできびきび勉強しろい」

「うううう・・・さっぱり分からないよぅ・・」

今、唯の再試の勉強をしている、なぜなら唯は中間テストで赤点を取ってしまったからだ
う～ん、これはどうするべきかな・・ん？そうだ！

「唯、明日は休みだし軽音部の皆を誘って勉強会をしよう」

「え？・・うん！！」

「皆に教われば、お前でも何とかなるだろ・・」Ｐｉ・・Ｐｉ・・Ｐｉ

とぅるるるるるるるるるるるるる・・・がちゃ

『どうした？桜？』

「おう、実は今唯の再試勉強してんだけど、よければ軽音部メンバーで集まって勉強を教えてやってくんね？」

『ああ～・・確か唯がテスト受かんないと部活続けらんないんだよね～・・ん！いいよ！澪達にはあたしが伝えとく！』

「おう、よろしく頼む・・明日、うちに来てくれ」

『おう！じゃな～』

「ん、じゃな～」

・・・・Pi！

「ってことで、明日みんな来てくれっからみっちりやれよ～」

俺は、唯を居間に残し部屋に戻った。

「は～い・・」

・・・翌日、平沢家・・・

「来たぞー、唯ー？」

「おじゃましまーっす！！」

「おう、いらっしゃい。今日はよろしく頼む。」

「あ、軽音部の皆さんですか？いらっしゃい。いつも姉と兄がお世話になってます！」

「「（出来た妹と兄だ！！！！）」」

「スリッパだ、はいてくれ」

「あ、荷物預かります。」

「「（ここは旅館か！！！）」」

・・・唯の部屋・・・

「あ、いらっしゃい。りっちゃん！澪ちゃん！」

「おう、唯。今日はみっちりしごいてやるからな！澪が！」

「お前も手伝うんだよ！！」

「相変わらず仲がいいなお前ら」

「む・・とにかく！始めるぞ！」

そこから二時間後、家に来た紬も交え、勉強会は夜7時まで及んだ

「で・・Xがこうなって・・Yがこう・・でaが代入・・・出来た！！」

「どれどれ・・うん、全部あってる！これなら大丈夫だろう！」

「そうだな、明日もこれなら大丈夫だな」

「じゃあ、そろそろ帰りましょうか」

「あれ？律は？」

・・・居間・・・

「～♪」

「ちくしょー！もう一回！！」

「おまえ、何やってんだよ・・」

律は憂と対戦ゲームをしていた。

俺は、律のそのずうずうしさと逞しさに呆れかえり、ため息をついた・・

・・・翌日、放課後・・・

「」

「真っ白だな・・唯・・」

「」ふらふら・・

唯は真っ白になり返却された答案も持って部室へ向かう

「大丈夫か？」

「だ・・・じょ・・・ぶ・・」

しばらく歩き、部室へ着く

「唯！どうだった！？」

「りっちゃん・・どうしよ・・」

「まさか・・！」

「ひゃ・・百点取っちゃった！！」

「「「なにーーーーーーー！！？」」」

こうして俺達は、テストを乗り越えた。

・・・ある日、部室・・・

「もうすぐ、夏休みだな・・」

「そうだな」

そう、もうすぐ夏休みである。運動部はもちろん、文化部も一部活動をする。

軽音部も活動するべき長期休み期間なのだ。原作ではここで合宿が提案されたけど・・

「このままじゃだめだ！合宿をしよう！」

とまあ、原作通りに合宿となり。

「「海だァあああああああああ！！！！！」」

むぎの別荘に来ていた。

合宿！！（前書き）

こんにちは！チルノです。
今回は合宿が始まります！！

合宿！！

はいどーも、平沢　桜です。現在俺ら軽音部は合宿でむぎの別荘に来ています。
着いて早々、律と唯が遊ぼうとした。
澪と俺で止めたがむぎのまさかの裏切りで多数決により遊ぶことに・・
今は、唯と律が海で遊んでいるのを俺、澪、むぎで眺めている。

「にしても・・あの別荘のでかさとむぎん家のスケールのでかさには驚いたな・・」

「ああ、それはそうだな。でも、こんなのもたまには良いんじゃないか？」

「・・そうだな」

俺と澪は互いに微笑む。
それを眺めてるむぎも話題のせいか苦笑している。

「おーい！みおー！さーくーらー！むぎー！こっち来いよー！！」

「おーくーん！みおちゃーん！むぎちゃーん！！おいでおいでー！」

唯と律がどこに持っていたのかビーチボールを片手に俺らを呼んでいる。

「・・・いこうぜ！」にかっ

「あ・・ああっ／／／／（笑顔は反則だ・・！）」

「え・・ええ／／／／（なんだろうどきどきする・・）」

「はーやーくー！！」

「おー、今行くよ！！」

ふむ、ビーチボールか・・俺の規格外の運動神経を見せてやろう・・！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

結果、俺は勝った。

途中から、俺の反則加減を見た４人がチームを組み、４対１のバトルになったが、

それでも俺は圧勝した。

ふん！見たか俺の規格外さを！！

「いやー！桜は強いなー・・」

「そういえば、おーくんは昔からずば抜けて運動神経凄かったんだよね・・」

「むむ・・ますますカッコいいな・・・／／／／」ぼそっ

「澪ちゃん？どうかしたの？」

「な・・なんでもない！」

「ははは、まあ俺も危なかったよ結構。」

「圧勝した癖に何を言うか！」

「はいはい・・っとこれで準備できたかな？」

今、俺らは備え付けのスタジオで練習の準備をしている。
俺が準備完了と言うと、唯と律が途端にだらけ始めた。

「床が冷たくて気持ちいいよ～・・・」

「なんか・・眠たくなってきた～・・・」

ｚｚｚｚｚ・・・・・
二人が寝始めた・・おい！
すると澪がスピーカーを寝ている二人の頭上に設置しベースを使って大音量を出す。

”ずだあああああああああん！！”

二人も、その音でしぶしぶ起き上がり楽器を持つ。
やる気が感じられないな・・仕方ない此処は炊きつけるか・・

「はあ・・律と唯、ここでまじめに頑張れば俺がなにか甘いものでも作ってやるから頑張れ」

「ほんと!?やる!やるよ!!」

「え～・・お前、そんなもの本当に作れんのか～?」

「りっちゃん・・おーくんの作る料理やデザートはね・・むぎちゃんのケーキより圧倒的においしいんだよ!!」

「な・・なんだってーー!!?」

二人の小芝居が始まった、それにより律がやる気を出して練習がはるかに捗った。

1，2時間後、4人は相当疲れたようで、その場にへたり込む。

「もうだめ・・疲れた～!」

「うう・・もう・・だめ・・だ!」どさっ

律と唯がオーバーに倒れ伏せる。

「確かに、かなり疲れたな・・」

「うふふ～」

澪が座り込み、むぎはそれを微笑んでみているが若干汗をかいている。

俺?体力無限の俺に何を言ってるんだい?

「ふう・・じゃあ、練習はこのあたりにして4人とも汗かいたろ?風呂入ってこいよ」

「うん、わかった～」
「じゃあ、お先に入るな」
「またあとでね～」
「のぞくなよ？」
律がにやにやしながら言ってきた。
「バカ言ってないで早く行け」
としっしっと手を振る。
それを見て律はつまらなそうに出て行った。
「さて・・俺は皆が入ってる間にデザートでも作るか」
～♪～♪～♪
・・・・
「～♪ふわふわたーいむっと」
「出来た！さてこれを冷蔵庫に入れて・・っと」
俺が作ったのは、杏仁豆腐。
フルーツがたっぷり盛られた自信作だ。
唯たちはもう少し入ってるだろうし、多分いい感じで出来上がるだろ。

～その頃の唯たち～

「澪ちゃんっておっぱいおおきいよね～・・・」

「な・・なんだ？いきなり」

「くそ、巨乳め・・！！私たちの恨みを喰らえ！」

律が澪にお湯をかける。

「ぶっ！！」

「おもしろそー！私も！え～い！」

便乗して唯もお湯をかける

「ぶふっ！！？」

そして、その結果。そこに、居たのはお湯を滴らせて青筋を浮かべる澪。

「おーまーえーらー！！」

『きゃー！！！』

とこんな感じで遊んでいた。

ちなみに紬はニコニコ笑いながらこんなふうに皆でお風呂に入るの

憧れてたの～という感じで眺めていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふ～・・あがったよ～おーくん！」

「あ～さっぱりしたー！」

「待たせたな。ゆっくり入ってきてくれ」

「桜君は何をしてたの？」

「ん？ああ、約束のデザートを作ってたんだ。冷蔵庫には言ってるから食ってくれ。」

「おお！本当か！分かった！」

「じゃあ、入ってくる」

俺はそこを後にした。

・・・・・・・・・・・・・・

で、出てきた。

え？時間飛んだ？男の風呂シーンなんてつまんないだろう？

つまりそういうことだ。

「で？お前らはなんで皆してテーブルに座ってんだ？」

「はは・・唯がな？デザート食べるのは桜が上がってから一緒にって言うから待ってたんだ」

「私たちだけ先に食べちゃうのはいけないからね！」

「ははは・・ありがとう唯」ぽす

俺は唯の頭を撫でる。

うん、良い感じの位置にあって撫でやすい。

「えへへ・・／／／」

「・・ん？」ゾクッ

寒気がする・・と後ろに振り向くと

「ニコニコ・・・」

「うふふ・・・」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

二人が、全く笑えない笑顔を浮かべていた。

唯の頭から手を離す。すると威圧感は無くなった。

「（う～ん・・俺、この二人にどっかでフラグ立てたかな？）」

以外にも鈍感でない転生オリ主なのだった。

「そ・・それじゃ、いただこうか！」

「いただきまーす！！」

それぞれは杏仁豆腐を食べる。

「う・・美味い！！！」

「ホントだ・・おいしいな。・・でも女としてこれは・・」ぼそっ

澪がなんか言ってるようだがよく聞こえない・・

「・・・・これに勝てる料理なんて・・」ぼそっ

紬もなにかいってるしかし聞こえない・・

「相変わらず、おーくんの料理はおいしいね～！」

あ、ちなみに晩御飯は練習前に済ませてあるよ？

・・・作者が忘れてたからじゃないからね！

んで、合宿1日目は終わった。

マラソンか・・・って誰だお前ら！？（前書き）

マラソンです、いやあ・・
男子勢をちょっとやりすぎました・・・

マラソンか・・って誰だお前ら！？

どうも、平沢　桜です。
あの合宿も終わり・・・え？1日しかやってない？いやだって・・
残りもおんなじ感じだぜ？
遊ぶ↓飯食う↓練習↓寝る・・ほらこれだけ！というわけで合宿終
わり！・・ちょ、石投げんといて！？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

おほん！・・・で、夏休みも終わり2学期！
2学期始まって有るイベントが待っている。
そうマラソン大会だ！で、今その話を教室で唯と紬と俺で話してた
んだけど・・

？？「平沢桜！！貴様に勝負を挑む！！」

と、謎のイケメン君が言うのだよ・・

「えと・・・誰？そんで何故？」

「俺はサッカー同好会　会長！杉本　剛！我らサッカー同好会総勢
は貴様に勝負を挑む！」

名前は分かったんだが、話を聞かないぞこいつ・・

「え〜と・・そんでなんd「平沢桜あああ！！我ら野球同好会は貴
様に勝負を挑む！！！」・・・はあ・・」

その後も、勝負を挑んでくる奴らがいた。
まとめると・・・

・挑んできたのは野球、サッカー、水泳、バスケ同好会の４つ。

・理由は、それぞれが軽音部メンバーのファンらしい、それで俺がその４人と仲がいいのを嫉妬して

・勝負方法は来週のマラソン大会で１位を取ること。

・勝った方（俺か各同好会のどこか）に軽音部メンバーがマネージャーとして入る。

・・・とこんな感じ。
正直めんどくさい！！

「まねーじゃー？・・・おーくん、どういう意味？」

「ん？つまりだ唯、この勝負に俺が負けたら軽音部の４人のうち１人がこいつらのどこかにマネージャーとして入会しないといけないってことだ。」

「ええ！？やだよお！そんなのやだ！」

バス同好会『ゆいちゃあああああん！！大好きだ――！！』

「ひっ・・！」

「わ・・わたしも・・そ・・それは嫌だわ・・！」

唯が涙目になっている、むぎも反論しているが声が震えている。
まあ・・こんな大勢で迫られたらな・・無理も無い。
とそこへ・・・

「おい！桜！聞いたぞ、どういうことだ！」

「私達が景品にされてるって・・」

律と澪が来た。なんとタイミングのいい・・

「知らん、こいつらに聞いてくれ。勝負を挑んできたのはこいつらだしな。」

「こいつらが・・！」

「あ・・あの！私たちを景品にするのは・・その・・やめてくれませんか？」

律が何か言う前に澪がそういった。

「「「「いや！それはできん！！軽音部の美少女は俺達のもんだあああああ！！！！！！！！」」」」

とほざく・・いい加減切れてきたな・・ぶち殺したくなるくらいだ・・

こいつらを物扱いしやがって・・

「おい・・てめえら」

「おーくん・・？怒ってるの・・？」

「お前らの言い分は分かった、いいぜ受けてやるよ。全員叩き潰してやる。」

「桜！？」

「大丈夫なのか！？桜！？」

「いくらなんでも無理よ！桜君！」

「いいから。大丈夫だ、俺を信じろ。絶対、お前ら全員守ってやるから。」にこっ

俺は、優しく安心させるように笑ってそういった。

「っ・・！そうか・・わかった信じるよ！桜！／／／／／」

「う・・うん、私も信じる！・・・／／／／／」

「わ・・わたしも！／／／／／」

顔が赤い・・どうしたんだ？

「・・・唯」

「・・・信じてるからね？・・・お兄ちゃん・・ぐすっ」

「おう、信じろ！」

唯が俺をお兄ちゃんと呼ぶ時はいつも俺を本気で信じてくれていて本気で心配している時だ。
俺はそれを一度だって裏切ったことはない。

「話は決まった、お前ら全員ここから出てけ！」

その一言で、彼らは全員出て行った。
不敵な笑みを浮かべながら――――

そこから、１週間。マラソン大会の日だ。まだスタートはしていない。

「よっ・・・ほっ・・」

「おーくん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

準備体操も終えて、スタート位置に並ぶ。
このマラソン大会は男女混合だ。奴ら同好会は全員男。
この春入学してきた男子勢だ。人数は全部で５０人ほど。
実質俺ＶＳ５０人という構図だ。

「位置について・・よーい・・」

スタートの合図、俺はいつでも走れるように身構える。

ぱあああん！！！

その音とともに一斉に走り出す。

が、しかし俺の体を誰かが後ろへ引っ張る。

「がっ・・！？ーーー！？」ずしゃあ！！

俺は後ろへ転ぶ、そして見たのは――――

気持ち悪い笑みを浮かべる男子共・・ブチッ！

「上等じゃねえか・・・クソ野郎共！！」

俺は全力で走りだす。

怒りは最高潮に達していた。

「汚ねぇマネしやがってええ！！！！」

「おおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

そして俺とクズ共の勝負が始まった

マラソンか・・・って誰だお前ら！？（後書き）

次は、マラソンの攻防です！

決着。（前書き）

決着です。

決着。

わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！

結果から言うと。勝った

それはもう物凄い勢いでごぼう抜きどころか出場者全員を抜いて最下位から1位。

「おーくん！すごいよ！！！」

「ふん。こんなんじゃ俺の体力の一割も削れないよ。っと唯、約束は守ったぞ？」

「でも・・桜花おまえ・・アレ・・」

と後ろから話しかけてきた澪は自分の後ろを指さした。

「あ・・・う・・・・・おお・・・」

「あくまだァ・・・・ああ・・・・」

「この世の終わり・・・・だあああ」

そんな感じでうごめく男子達。ははははやりすぎたかな？

「やりすぎだよ！！」

「そうかしら～？むしろ丁度いい感じじゃないかしら？」

「そう・・・か？」

「ま、これも仕返しってことで。」

何があったか？良いよ少しだけ話してあげるよ。

＊

「おっりゃあああああ！！」タタタタタ・・

全力で走る桜花。逃げる会員の男子達

だが桜花は無残にもそれらを蹴散らして走り去っていく。そう・・・

文字通り蹴散らして。

転がって行く男子

逃げ出して行く男子

泣きそうな男子

それらを尻目に、桜花は不敵な笑顔で走り去る。
それを見た男子女子勢は口をそろえてこう言った。

「あれは、まさに悪魔だった・・」

＊

「まあ、良いじゃん？軽音部は無事だった訳だし？俺もそんな無茶してないだろ？」

「ここまで凄い身体能力持っててなんでかこいつ軽音部なんだよなあ・・」

そう呟く律。それはね？俺だから仕方ないよ。

「じゃ、帰ろうぜ？もう放課後だぜ？」

もうマラソン大会も終わり、いろいろな後処理も終わっている。後は変えるだけだ。

「おう！帰るぞー！澪ー！むぎー！」

「あ、うん」

「ええ」

各々帰る準備をする三人。

「唯。帰ろう」

「うん！」

・

・

・

翌日、休日

今日は休みだ。そんなわけで久しぶりに一人で街をぶらぶらしてる。
とりあえず・・楽器店でも行こうかな？と思いたち歩きはじめる。

「は～・・ひ～まひまひまひ～まひま～♪・・・ん？」

・・・ーーーーーdさい！！

「もの音というか、悲鳴？かな・・？」

そう悲鳴が聞こえた。路地裏の方かな？やっぱりけいおん！の世界にも犯罪やこうゆう事はあるんだな・・行くか。

そして俺はその路地裏へ入って行く。

梓視点

私の名前は中野　梓、中学三年生だ。私は楽器屋へギターの整備へ行く途中に大柄の男の人三人にナンパされた。

もちろん断ったのですが・・やけにしつこくなってきて強引に抵抗したら、むこうが怒ったみたいで無理矢理路地裏に引き込まれた・・

「うう・・・」

「あのさぁ？ちょっとでいいんだよ。俺らと良いことしようぜ？」

「ほらほら、よくしてやっからさぁ？」

「イケちゃうぜ～ほらほら～」

凄く嫌な感じ・・この場からすぐに逃げたい・・でも後ろは行き止まり。だれか助けて！

「うううう・・」ぽろぽろ

自然と涙があふれてくる

「おいおい、泣いちゃったよ～へへへ」

「いいねえいいねえ。もう我慢できねえよ」

「ヤッちまおうぜ！！」

そう言う男の一人の腕が私にのびてきた。
目をギュッと瞑り諦めたその時

「う～す。あれ？何してんの君達。」

そんな声が聞こえた。
目を開けるとそこには手を伸ばす不良の腕を掴んでたたずむ男の人の背中がありました。

桜花視点

路地裏に入ってみるとそこには原作キャラである中野梓ちゃんが不良三人に絡まれてました。
会話を聞いてると、ろくな奴じゃないなと分かり、介入

「う～す。あれ？何してんの君達。」

「ああ？てめえなんだ？」

「やっちまおうぜ？男はいらねえよ」

「おう」

そう言って構える馬鹿トリオ。ま、とりあえず

・

・

・

瞬殺してみた。結構弱かった。

「うげえ・・つよ・・」

「お、おぼえてろよ・・」

「ちきしょー・・」

そう言って三人は逃げ去って行った。

「え～と・・大丈夫？」

「え・・？あ、はい！ありがとうございます！！／／／」

「そっか、それはよかった」にこ
笑顔で話しかける。さすがに襲われた後だ、不安だろうしね
「は、はい・・・／／／／／」
うわ顔真っ赤だ。大丈夫かこの子・・
「まあ、とりあえずここから出よっか。ほら歩けるかい？」
手を取り引っ張って行く。
「あ・・・／／／」
「ふう・・大丈夫かな。じゃあ、またね」
街中にでて、梓と別れる。
後ろで梓がなんか言ってた気がするがそのまま去って行った。

楽器屋

なんてこった。
「あの！」
「え？」

「さっきはありがとうございました！！」

梓に再開しちゃった。

「あ～・・いいよいいよ。また会うとは思わなかったよ・・」

「あ、はい。そうですね！また会えてうれしいです！」

嬉しいこと言ってくれるね～

・

・

・

しばらく楽器屋で談笑していたら、俺が先輩で自分もそこを受ける予定と話してとても嬉しそうにしてやる気が一層湧いて来たそうだ。それはよかったが・・どうしてだろうな。

「じゃあ、梓ちゃん。またね受験がんばってね？」

「は、はい！！頑張ります！桜先輩！／／／／／」

終始顔真っ赤だったなあ・・大丈夫だろうか？

決着。（後書き）

今回は不調だったかな～？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1816ba/

世界を周るは転生者(チート)inけいおん！

2012年1月9日01時51分発行